

## COMON 概念に基づく研究評価における数値指標の取り扱いについて

国際卓越研究大学の申請にあたっては、Q 値など、いくつかの KPI (Key Performance Indicators) が設定されています。COMON 概念に基づく研究評価と、これらの KPI との関係について、明確にしておく必要があります。

KPI は、大学全体としての方向性を社会に説明し、研究活動の健全性を定点的に把握するためのモニタリング指標です。一方、COMON は、大学を構成する約 40 の部門がそれぞれの特性に基づいて研究文化を育み、その価値を可視化するための仕組みです。したがって、両者は目的とスケールを異にしながらも、相互に補完し合う関係にあります。COMON は、KPI に還元できない多様な研究価値を可視化し、KPI の背後にある学術的厚みと創造的挑戦を支える枠組みです。

COMON は、数値指標そのものを否定する制度ではありません。しかし、「専門家の正しい分析によって立てられる数値」を唯一の評価基準とみなす考え方には、根本的な限界があります。なぜなら、研究という営みは分野によって尺度が異なり、時代によって価値の定義も変化するからです。Q 値をはじめとする論文関連指標や外部資金獲得額など、いずれの数値も「部分的な事実」にすぎません。それらは状況依存的であり、「正しい数値」などという普遍的基準は存在しません。専門家がどれほど緻密に分析しても、その数値は「特定の前提と仮定のもとで導かれた数値」にすぎず、唯一絶対の判断根拠にはなりません。

COMON は、この限界を踏まえ、数値を目標ではなく、研究の健全性を点検するための参考情報として位置づけています。数値を目標化すると、研究者は短期的な数値上昇を狙うようになり、挑戦や多様性が失われます。結果として、大学全体の研究力は中長期的に確実に劣化します。

これは、すでに英国や欧州各国で実際に経験された「不都合な真実」です。彼らはその反省を踏まえ、数値目標中心の評価から脱却し、ナラティブ（記述的）評価への転換を急ピッチで進めています。

ナラティブ評価は主観的に見えても、多様な証拠、十名程度の審査者、透明な議事記録によって十分に客観性を担保できます。わが国でも JST や科研費など主要研究費制度で、すでにこの方式が確立されており、単純な数値指標だけでの評価は行われていません。さらに、これらの仕組みは外部監査にも十分に耐えうる運用がなされています。

COMON は、数値を排除するのではなく、数値を誤用しない評価文化を根づかせる取り組みです。健全な大学経営と責任ある研究評価を両立させる唯一の道は、数値目標を迫ることではなく、対話と証拠に基づく評価を積み重ねることです。